
Dear Multi

やのゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dear Multi

【Nコード】

N5685N

【作者名】

やのゆい

【あらすじ】

リーフの「To Heart」をベースにオリジナル展開の小説を書いてみました。

メイドロボット「マルチ」の大ヒットから五年後のお話です。

主人公の長瀬は来栖川コーポレーションの若手研究員。マルチの新型を開発する部署で働く彼の元に少女が降ってきた？

ボーイミーツガールならぬ、ユースミーツガールです。

原作知らなくても読めますので、是非どうぞ。

八年前に完結した作品を改稿してアップしているので、未完はありません。安心してお読み下さい。

＊なお、掲載は不定期です。すみません。

s t e p 1 開発準備 (1) (前書き)

手にとってくれて、ありがとう！

「Dear Multi」のスタートです！

step1 開発準備 (1)

五月十二日。

風そよぐ新緑の五月。

入社二年目の私は五月病とも無縁に与えられた仕事をこなしていた。

複合企業来栖川コーポレーション。そのエレクトロニクス部門開発2課システム拡張プログラム班。

そこが私こと長瀬祐一の所属する部署であり、生活の場である。と言っても普通の人には「どこそれ？」と問い返されてしまうだろう。しかし、全世界を驚かせたメイドロボット「HMX-12」を開発した場所だと言い直せば、子供でも分かってくれる。ついでに合コンでの切り札にもなる。そう、ここが「HMX-12」マルチのふるさつである。

通称マルチ。

あの大ヒット商品を生み出したのが、この研究所なのだ。

そして今、私たちは新作介護ロボット「HMX-12h型」の開発に追われている。どれほど忙しいか説明すれば、『最後』に出勤したのが一昨日の朝なのだ。それなのに私は職場にいる。つまり、社宅に帰っていない。しかも、二泊三日ではなく『二泊』が抜けて『三日』。私は三日間、パソコン画面に向かい合っているのだ。

「長瀬君！ 気晴らしに行ってきたさい！ 根を詰めても良い仕事は出来ないわ！」

矢橋班長。

私の直属の上司で三十歳独身の女性研究者。感情システムの概念

を完成させた若き天才だ。童顔の彼女からはとてもそうは思えないが、耳元で切りそろえた髪から覗く目の下にはクマが出来ている。そんな上司を差し置いて休憩できない。

「もう少しでエラーチェックが終わります。班長こそ休んで下さい」

「じゃあ、わたしに缶コーヒーを買ってきなさい。業務命令」

「了解！」

業務命令は絶対。そして、矢橋班長の微笑みも絶対。

椅子から立ち上がると足の筋肉が強張っていることに気が付いた。たしかにずっと座りっぱなしで、仕事の能率も下がっている。

「いつものブラックでいいですか？」

「そうね」

「先輩方は何飲みます？」

五人の同僚に声を掛けたが。机につっぱしたまま返事がない。完徹二日後の夕方まで起きていられる体力は、班長と私しか持っていないようだ。

「では、おつかいに行ってきます」

「途中で転ばないようにね？」

私は子供扱いされている。

しかし、矢橋班長は予言をしていたのだ。

私がこの後、転ばされることを。さらに、この『おつかい』が、これから起きる事件の起因であり、私の研究人生を変える出会いに繋がるなど、誰が予想できるだろうか？

ボーイミーツガール、いやユースミーツガールが始まるなんて、この時の私には思いもよらない。

時刻は十六時。五月晴れが夕日に染まった第二水曜日。
新型マルチの開発が動き出した。

step1 開発準備 (2)

自販機は、開発室を出て階段を下りた玄関ホールの先にある。

上から見るとコの字になっている研究棟。囲まれる形で中庭が広がり、その一角に自販機が設置されている。

私は凝り固まった肩を回しながら廊下へ出た。

白で統一されている研究所の内装。

最初は無機質に感じて好きではなかったが、入社二年を数える最近になって、ある種の暖かみを感じるようになった。そして、日差しによって色を変える白壁に愛着すら感じている。ヒューマノイドロボに対する憧れが、研究所への愛着に繋がるとは思わなかったが、悪くないことだ。

しかし、この廊下を歩くようになって二年。

そろそろ結果を出さなくてはいけない。先輩達の『下請け』から脱しないことには、自分のしたい研究などできるはずなのだ。

それにしても肩が痛い。

パソコンに向かってる時はいいが、一旦席を離れるとダムの堰を開いたように肩こりが襲ってくる。不快な肩こりだが、今は耐えるしかないだろう。二週間後にプレゼンが控えている。スケジュールの遅延は許されないのだ。

大きなプレッシャーに対して、大きく伸びをすると開放感を覚えた。矢橋班長が言う「息抜き」の効果を十二分に感じた。あの人はいつも正しい。彼女が好きな曲を口笛にして階段を下りていると、背後から悲鳴が聞こえた。

「わ、あわわ！ ど、どいてくださいいい！！」

「のわっ!？」

振り返ると、巨大なダンボールが迫っていた。

ダンボール越しに何者かが注意を促すが、避ける暇などない。衝撃によって階段から転げ落ち、私はダンボールから飛び散った大量の金属を受け、ムニッとする何かに覆いつぶされてしまった。

矢橋班長の予言が当たった。正確には転ばされたのだが、彼女の発言はいつも正しい。さすがにこういう時は外れて欲しいが、的中率の上昇に貢献すれば給料があがる。

この尻の痛みも給料のうちだ。

「あいたたた……」

とっさに受け身を取ったので怪我はないが、周囲に機械部品が散乱している。そして、空になったダンボールを被って倒れている奇っ怪な人がいた。何者かは、このドジっぷりで分かっている。

「だいじょうぶか？ 拾われマルチ？」

開発部で雑用のために二ヶ月前に雇われた……というより使われているメイドロボ『HMX-12』通称マルチだ。

頭に被ったダンボールを取ってやると、愛らしい顔が現れた。

クリッとした瞳に、プックリと柔らかいラインの頬。光に透けると鶯色に輝く常磐色の短い髪。

誰が見ても可愛いのは、万人受けするべくデザインされたためであり、中学生くらいの幼児体型もアンケート結果を元にして設計された結果だ。しかし、この機体は均一に可愛く量産されたはずなのに、どこか間の抜けた顔をしている。そして、その生い立ちも間が抜けている。

……迷子になって保護されたい。

ロボットが迷子。

そして、所有者不明のまま、警察から遺失物として返却され、工場に戻って来たのだ。普通、再調整して販促にでも使うところだが、サポートセンターは細かいことを気にせず、こいつに女子社員用の制服を着せ、我が開発部に派遣した。そのため我々は「拾われマルチ」と、あだ名して雑用に使っている。

尻餅をついて、下着を丸見えにした状態の『拾われマルチ』。パンチラ防止機能が故障しているようだ。

「ご、ごめんなさい……お怪我はありませんか!？」

「人の心配より自分のダメージコントロールをしろ。まずはパンツが見えているぞ」

「はわっ!」

バツと足を閉じるマルチ。

しかし、この角度とその体勢からでは、まだ見えている。

可愛らしいには可愛らしいが、危なっかしくて仕方がない。私は再びパンチラを指摘しようと思ったが、そこばかり注意するのも妙な疑惑を抱かれそうなので、敢えて言わない。無意味に好感度を下げると必要はない。

「もう少し気をつけて行動しろ。これは一課への届け物だろう?」

私はバラバラに散らばっているバランスーやらサスペンションなど、拾い集めてやった。

「あ、あ、私がやります……わっ!？」

球型ジョイントに足を取られて再びずっこけるマルチ。

今度は思いっきりパンモロした。パンツがブラウスの裾を挟んでいるところを確認したが、ロボットに欲情する精神を持たない私はマルチを抱き起こしてやった。実家にいる小学生の姪の方がしっかりしている。

「まったく大丈夫か? 情けないことこの上ないぞ?」

「も、申し訳ありません」

顔を赤くして立ち上がったマルチのスカートを叩いて綿埃を払ってやった。モゴモゴ何かを言おうとするマルチを制して、二度の転倒で広範囲に飛び散ったパーツやらをダンボールに押し込めた。

電子部品は壊れているだろう。

まあ、ドジっ娘に運ばせる部品だ。高価な物ではないはずだ。

「これでよし。気をつけろよ？」

「は、はい。」

今までのことを含めて叱ろうかと思ったが、すでに涙目になっている彼女に気が付いてやめた。それに、この手の失敗が多い『拾われマルチ』をいちいち咎めていたら、口がいくつあっても足りやしない。

「結構重いな。誰かに手伝ってもらえば楽だったろうに」

「みんな忙しそうだったもので……わたしが持ちます」

「つたく、少しは学習しろ、そっちの端っこを持て。これは命令だ」

「は、はい……」

向かい合う形でダンボールを持ち、横歩きになって運ぶ。窓から薄ぼんやりと橙色に染まった景色が見えた。

日没が早い。

担当している空間認知プログラムのエラーチェックはまだ半分しか終わっていない。二週間後のプレゼンに間に合うだろうか？ 『自分のやりたい研究』以前に、自分の仕事をこなせなければ話にならない。合理的に考えれば、こんな拾われマルチに関わらず、さっさと缶コーヒーを買いに行くべきなのだ。

つい苛立ってしまう。

相当ストレスが溜まっていると自覚している。そして、ストレスは仕事の能率を下げ、失敗を多くする。

分かっている。

エラーチェックが捗っていないのは、理想と現実がストレスになっているためだ。

もっとも、それを自己分析できても簡単に解決できる問題ではな

い。

そういえば、ここのところ目の前のメイドロボも失敗が多い。開発一課の所有なので用事を頼むことは滅多にないが、そう思う。

拾われてきた頃は、もっと普通のメイドロボらしく仕事をこなしていた気がする。

もしかして、こいつもストレスが溜まっているのだろうか？

私は無言のまま、荷物の端を持つマルチに視線を移した。

マルチは疲れを知らない機械だ。だからと言って、ストレスがないことはない。現に、心理的ショックと度重なる虐待のストレスで『自殺』をしたHMX機もある。心の発達と発展には、適度な抑圧が必要なのは人も機械も同じだが、過度のストレスが『心』に多大な悪影響を与えるのも同じである。それほどまでに、この人型ロボットは人に近い。

私はこの「拾われマルチ」が、心配事を抱えているのではないか
と思いはじめた。

s t e p 1 開発準備 (2) (後書き)

次回、月曜更新。

「拾われマルチの秘め事」

秘め事と書いてストレスと読みます。そろそろルビについて考えるべき時です。

step1 開発準備 (3)

「すーとっぷ！」

数秒遅れでビクッと歩みを止めるマルチ。

「あの、どうしました？ 一課の研究棟はまだ先ですよ」

「のどが渴いた！」

「は？」

「自販機への近道はこっちだ」

一課とは真逆に位置する中庭を指差した私に、マルチは首を捻った。

「それはそうですけど、この荷物を早く届けないと」

「いや、今すぐ水分補給をしなくては死んでしまう」

するとマルチは笑って、ダンボールを抱え込むようして持ち替えた。

「それなら、わたしは大丈夫です。のど乾きませんから。後はわたしが運びます」

「いや、お前さんもそろそろ充電のはずだ。自販機の200Vの電源ならすぐ癒されるぞ」

「え？ それじゃ、自動販売機は？」

「犠牲になつてもらう。付いてこい！！」

私はマルチからもぎ取るようにしてダンボールを置いた。

「そんな乱暴にしたら駄目ですよ！」

「もう乱暴にした後だ。とっとと付いてこい！ これは命令だ！」
グタグタされると面倒なので、命令形にして従わせる。途端にロボットのマルチは、走り出した私を追い始めた。

いつも利用している自販機の周りには、ちょっとした植え込みと

ベンチがある。

昼を食べるには寂しいが、数分間の休憩には重宝する場所である。西の空から夕日が差し込み、歩道の煉瓦がきれいな色に染まっていた。

私はほとんど条件反射的に硬貨を入れ、左から二番目のボタンを押す。ほどなく、ガコンとした音と共にコーヒーマシンが落ちてきた。

「ほら次はお前さん」

「あ、あの」

「ほら、こっちこい」

私は所在げなく立ち呆けていたマルチの腰を引き寄せ、そのままブラウスを捲って背中から充電ケーブルを引き出した。

HMX-12の初期型には、手首に充電コネクタがあったが、あまりにシニールということで、今は背中にある。ケーブルを伸ばしたマルチは「んあ」と妙な声をあげながらも、システムをレストモードに切り替えた。

使用説明書には『レストモードに切り替えてからケーブルを伸ばしましょう』と、35ページ目に書いているが、壊れることはない。ただ機体が恥ずかしがるだけだ。

私は自販機のコードをコンセントから引き抜き、代わりにマルチのケーブルを差し込んだ。電気を横取りされた自販機は、かわいそうにモーター音を止めてしまった。

「これでよし」

マルチをベンチに座らせた。

充電時は人に例えれば『居眠り』に近い状態でもあるので、マルチの目はトロロンとしている。

「……ここ、落ち着きますね」

レストモードのせいでマルチは眠たげな声でそう言い、ベンチの背にもたれた。

「初めてか？ この研究所に来てだいぶ経つだろうに」

「……えっと、飲み物は必要じゃないですから」

「そりゃそうだな。今度からここを充電の場所にすればいい」

アハハと承諾とも付かぬ笑い声が返ってきた。

「充電している時が、一番いいです。よけいなことを考えなくていいので」

私は缶コーヒーのプルタブを引き上げながら横目でマルチを見つめた。

「余計なことって、何を考えているんだ？」

「え？」

「今言ったろう？ 余計なこと考えてるって」

「そんなこと言いました？」

とぼけているようだ。寝たふりをしている。

「ったく、気になるなあ。自分でふったんだろ？ 答えるよ。命令

ではないが、答えろ」

「聞いてくれるんですか？」

「ああ」

やはり悩み事があるようだ。

私に機械の女の子が抱える悩みに答えられるか分からないけれど、何かに悩んでいるなら、見逃すわけにはいかない。また、下世話だが好奇心もある、是非とも聞き出したかった。

しばらく無言が続いた。

どうやら言い出しづらいことらしい。私は辛抱強く待つことに決めた。IDを持つ私がアカウントコード共に命令すれば、何を悩んでいるのかすぐに分かるが、そんなことをしても、何の解決にもならないし、そんな非情なことをできるはずもない。彼女はヒューマノイドロボであるが、ロボの前にヒューマンが付いているのだ。コーヒーに口を付け、チビチビ飲みながら待った。

しばらくすると、マルチは意を決したのか勢いよく立ち上がり、充電コードを抜き自販機に電源を戻した。

再びモーターを回し始める自販機。

マルチはそのまま自販機の前に立つと、ポケットから小銭を取り

出し、左から三番目のボタンを押した。

「私、これが飲めるようになりたいんです。」

取り出し口から取り出した『おいしい紅茶』をかざしそう言い放った。

茶？

「私たち『HMX-12』はご承知の通り、飲食ができません。実際、食べ物を通して燃料の補給をするのは非効率の上、コスト面でも非生産的というほかありませんから」

「あ、ああ……そうだな」

私は取り憑かれたようにそう言うマルチに対して、そんな平凡な相づちしか打てなかった。

様子がおかしくはないか？

立ち上がって、演説でもしているかのようなマルチの瞳からは、異様な光を感じる。マルチは紅茶の缶を弄びながら言葉を続けた。

「けれど、おかしくは思いませんか？」

「なにがだ？」

「私たちは、ここまで人と同じように作られたのに、食べ物を摂取できない。飲み物を飲めない。おかしいとは思いませんか？ 長瀬さん」

「おいおい。お前はロボットだろ？」

つい、そう言ってしまった。そして、それは間違いだった。

「でも、姿は人間です！ だったら、これを飲めないといけないんです！」

拾われマルチは、感情が爆発したように叫ぶと、紅茶のプルタブを勢いよく開き、そのまま飲み干した。

すぐに口から溢れる赤茶の液体。

私は突然のことに止めることもできず、慌ててマルチの持つ缶を拳で弾いた。だが、かなりの量が口内に入ったらしく、口から溢れ

ながらも人間の気管に当たる放熱ファンへ、紅茶が音を立てて吸い込まれていた。

「ばかやろう！」

すぐにマルチを抱きかかえて、水分を吐き出させようと試みた。ただでさえデリケートなHMX機に水が入っては大変なことになる。下手をすれば、本体を取り替えなくてはいけない重大な自傷行為だ。基本プログラムで上位に指定されている禁止事項。

自ら紅茶を飲もうとするなどプログラム上、あり得ない。

「すぐラボに行くぞ！」

マルチを背負おうとすると、目に大粒の涙が流れていることに気が付いた。

「何か、あったのか？ お前？」

「な、何もありません……た、た、ただ少しでも人に……ひ、ひ、人の役に立ちたいんです、す、す……」

最後の方は声にならず、咳と泣き声に変わった。そして、緊急停止モードに移行して、全機能が停止した。

マルチの悩み事。

ただ、食べ物を食べたいという欲求からきているのではないことは確かだった。

人の役に立ちたいとマルチは最後に言った。

食べるという行為を求めているのだ。

彼女の行動はそれを示している。

だが、その理由は？

今はただ人形と化したマルチを抱えて走るしかなかった。

step1 開発準備 (4)

ラボで治療を受けるマルチ。

研究員たちは運び込まれたマルチを見るやいなや、工場のユーザーサポートへ送ることを勧めた。

しかし、措置が遅れば記憶回路が破損する可能性があるのです、彼らに無理を言って修理を頼んだ。水分が機体の深部に入っていれば修復は困難だ。一滴の水で周囲一連の動作を司る部品が大小併せて100近くダメになることもある。それには早期発見と早期治療が必要になる。

幸い、マルチが飲み込んだ紅茶は、放熱ファンを覆っている集塵フィルタで止まっており、大事には至らなかった。

私は、念のためと言って、エアクリーナーで丹念に乾かしてくれる研究員に感謝した。

研究員はマルチを分解するとき、なぜ機体に紅茶が入ったかと問われたが「第三者のいたずら」ということにしておいた。自傷行為をしたと言え、スクラップにされかねない。

怪しまれたが「そういうことかと」勝手に納得した研究員。彼はあくびをしながらラボから出ていった。

拾われマルチは運がいいようだ。

作業台の上で上半身裸にされているマルチを抱き起こし、電源コードを繋いでやった。外部コントローラーで軌道シグナルを発信すると、きゅいーんと起動音がして、ベッド脇のモニターが緑色の数字を羅列し始めた。修理に使ったモニターが機体と接続したままなことを忘れていた。

折角だから、このまま彼女が紅茶を飲んでしまった原因を探ろう。機体の修理は完全だが、研究員はプログラムのチェックをしていない。根本的な解決を図らなければ、また液体を身体に流し込んでしまうかもしれないのだ。

私は来栖川エレクトロニック開発課に二年在籍している男でもあり、天才矢橋の門下にいる社員だ。自傷行為の原因究明など朝飯前……のはずだ。

メンテナンス画面を開き、不安定な箇所を探す。

システム面に動作不良を起こす部分は見あたらなかったが、感情を制御するメモリーの一部に不鮮明なエラーとも言うべき箇所が確認できた。

これは『感情プログラム』に食い込んだエラーだ。

人間の疾患に例えれば『脳』の異常と言える。そして、外科的に治せる箇所ではなく、カウンセリングのような治療法しかない。

私はキーボードを拾い上げ、Cのボタンを押した。

起動中にこのボタンを押すと、機体を介さずテキストによってマルチと会話することができる。修理が終わったばかりの体を動かすのもかわいそうだったし、なによりこの方が、気楽に話ができそうだった。

「おはよう、気分はどうだマルチ？」

キーボードでメッセージを打つ。インターネットでのチャットと同じように会話ができるはずだった。

しかし、外部モニターに表示されたのは「動画」だった。

どこかの家、しかも豪邸を映すマルチ視線からの映像。

こんな映像を映すようには操作していない。いったいこの映像は何だ？

ブチッと映像が途切れる。

再び映り出すと今度は目の前に女の子が映っていた。

音声のない映像の中で、女の子が何事かしゃべっているようだ。

しかし、その子はひどく弱っているように見えた。

見知らぬ少女。もしか、この子供がマルチのマスターなのか？

しかし、この少女は、長い髪の艶を欠き、頬に張りがない。病気を患っているのだろうか？ 顔立ちが整っている分、よけい衰弱しているように見えた。

女の子は上向きにしばらく、何か話していたが、しばらくすると俯いてきびすを返し歩き出した。後を追うように動き出す映像。そこでまた、映像が途切れた。

モニターの表示色が白黒のせいか、妙に生々しく、必要以上に古く感じられる。

だが、このモノクロ映像はマルチが「見た」記録データに違いがない。原因は分からないが、彼女は過去に採取した映像を保存している。

そして、マルチが拾われてから、半年も経っていない。この映像は、拾われる以前の記録のはずだ。

十秒ほど、波を映していた画面が何やら輪郭を捉え始め、鮮明になっていった。

どうやら、食卓のようだ。相変わらず立ったままの視点で豪華な料理を見下ろしている。

先の女の子も視界に入っていた。
が、人間はその子だけだった。

「いや！」

突然、音声が入った。

「お願いですから、お食べになってください」

「人は食べなくては死んでしまいます」

「まずいのですか？」

「ほかの料理とお代えすればよろしいのですか？」

「え？」

「ごめんなさい、私はものを食べることができないのです」

「ごめんなさい」

「一緒に食べることはできません」

「許してください」

「許してください」

「どうかおゆるしを」

「ゆるして」

「ゆるして」

「ゆるして」

画面が激しく揺れながら、ステーキやスープをひっくり返す。いや、食事に向かって倒れたのだ。

悲鳴がスピーカーに木魂し、画面がブラックアウトした。

私は黒い画面を呆然と見続けた。

step1 開発準備 (5)

「な、なんだこれは？」

最後の方は後から音声が付加えられていた。
というより、感情が焼き付いたというような印象を受けた。

私は再び見返すために、キーボードを操作し今の映像をリピートする命令文を打った。しかし、マルチからは何の応答もなく、急にシステムが割り込むと再起動を始めた。

「あ、長瀬さん」

脇でマルチの声がした。

今度はモニターのスピーカーからではなく、マルチ本体からの発声だった。

先ほどの映像は、感情プログラムのエラーによるものなのだろうか？ もしそうなら、今のマルチは人で例えるところの錯乱状態に陥っているはずである。

しかし、ベッドから起き上がろうとするマルチは普通そのものだった。

「……大丈夫か？ マルチ？」

私は起きあがろうとするマルチを止めてそのまま寝かせた。

「えっと……？ わたしは……？」

どうやら、今の「映像」を出したことへの記憶はないようだった。いや、そもそもなぜラボで寝かされているか理解できていないようだ。

「私と、中庭で休憩していたことは覚えているか？」

「はい」

「それから、お前は買った紅茶を飲んだんだよ」

「え？」

「覚えてないのか？」

「紅茶って、私は飲み物を飲むようには作られていないじゃないですか……」

どうやら映像のことは覚えていないようだ。

プログラム上あり得ない。うちの製品はシステムエラーを起こした前後を記録するように作られている。もちろん、エラー原因を探るためだ。航空機のブラックボックスと似たようなパーツが取り付けられている。

調べなくては。

私はそれ以上は追求せず、マルチから伸びている検査用のケーブルを抜いてやった。

何力所からか抜いてやったところで悲鳴が上がった。

また暴走か？！

「な、長瀬さん、私、なんで服を着てないんですかー！！？？」

……全く、おかしなやつだ。

s t e p 2 開発進行 (1) (前書き)

拾われマルチのストレスの源とは？。

彼女の持ち主だった幼女は何者なのか？

ロボットの心を読み解き、人を知る。

長瀬の研究者人生が進行を始める！

どうぞ、お付き合い下さい♪

step2 開発進行 (1)

あれから七日。

私はマルチを気にしつつも普段の生活にいそしんだ。

彼女の不調は心に引っかかるが、プレゼンの日は着実に近づいている。エラーチェックの仕事は気が抜けないし、何よりもマルチ自身が元気なので、先日的一件は矢橋班長にも相談せず、そのままにしている。

変わったことと言えば、今までそれほど仲のよい共有ユーザーではなかったマルチが私の所へ来て、茶を入れたり、肩を揉んだりするようになったことだろう。

マルチの所属は一課だが、それを咎める人はいないし、二課の同僚も冷やかしながらも黙認してくれている。いつの間にか、拾われマルチは二課の受付みたいなことをするようになっていた。

「……長瀬君。ちょっといい？」

矢橋班長に呼ばれて、デスクに赴くと、真面目な顔をした彼女に小声で尋ねられた。

「あのドジっ娘をどうやって更生したの？ プログラム上あり得ないわ」

「は？」

まあ、この一週間、マルチは上手くやっている。新人社員と同程度の仕事をこなしているのだ。

「更生っていうほど、仕事しているわけではないと思いますけど？
そもそも班長の考案した成長プログラムが正常に機能しているんじゃないのですか？ 今までがおかしかっただけで」

「らしくないわね、長瀬君。わたしの論文を暗記しているんでしょ

？　じゃあ、二百三十一頁の四行目から十行目を要点だけ言ってみなさい」

私が敬愛する矢橋班長。彼女の論文は穴が空くほど読んだ。

「感情プログラムの性能効率を高めるほど、対人コミュニケーション能力が低下する……でしようか？」

「もっと簡潔に。そして簡単に」

私としては簡単に概略を説明したつもりだったが足りなかったようだ。身近な例えを使ってみよう。

「ヒステリックな女はコミュニケーションができない」

矢橋班長は満足した。

「その通りよ。感情をシステムに組み込むと、他の能力とバランスを取ることが重要になる。わたしが当時苦労したのは、そのバランスなの。テスト機で『感情』を優先させてみたところ、その娘は、ヒステリックに、言葉を忘れてキーキー言うことしかできなくなっただわ。それで、能力値パラメーターの感情が占める割合を抑制して、現在の黄金比に落ち着いた。その辺りは理解しているんでしょ？」

そりゃ勿論。

『心』という目に見えない『物』を、『認知』『判断』『行動』に分けてシステム構築。それを矢橋京が考案した『矢橋公式』に当てはめて、全能力を最大限に発揮できる『感情』を値として算出する。

すると、もっとも人間らしく感情が働く『認知』『判断』『行動』の全システムに占める割合が、美術で頻出する『黄金比率』の1.61803……に合致するのだ。

その事実是世界中に驚きをもたらした。

人間の『心』が最も美しい『黄金比率』に当てはまることがロボ

ットの開発過程で発見されたのだから。

その発見時、私は高校生。

矢橋班長は二十三歳。私は矢橋班長の発見した公式に魅せられて、この研究所を目指した。

「班長の感情プログラムはうちのマルチ型に搭載されています。あの拾われマルチが工場出荷時と同程度の能力を示しているのは、そのプログラムが要因になっているんじゃないのですか？」

矢橋班長は溜め息をついた。

「私はね……あの阿呆マルチが、人並みに戻れるプログラムなど組んでいないよ。君も知っているだろうが、心の発達を促すために、彼女たちはストレスを感じるように作っている。そして、ストレスに晒された機体が能力低下するようににも設定している。……だけど、わたしのプログラムでは『過度のストレス』に陥った機体が持ち直せるように作れていないんだよ」

「は？」

持ち直すように作っていない？ 初めて聞く。矢橋班長はマルチ型を人と同じように作ったのではないのか？

「長瀬君。君は自殺したいと思ったことはないかね？」

突然、自殺という単語を出した矢橋室長に驚いた。

「いえ、ありません。今のところ、死にたいほど嫌な状況に陥ったことはありませんから」

「わたしはある。中三の頃だな。好きだった後輩にフラれて、それから十五回ほど学校の屋上に昇った。さすがに大学に通い出してから収まったけどね」

ちよ……十四才。

つか、この矢橋室長の失恋期間の長さも異常だ。私の驚く顔がお

かしかったのだろう。おかっぱの髪を揺らして笑った。

「過度のストレス……わたしの場合は失恋だったが、その傷が癒えるまで八年もかかった。つまり、わたしはたまたま人間に生まれ、たまたま自殺しない星の周りに生きることができたが、マルチ型は過度のストレスを癒す前に、自己完結して精神崩壊を起こす。未だにそれを防ぐ公式は見つかっていない」

「えっと……それは拾われマルチが、機能低下する程のストレスを受けたにも関わらず、未だに死んで……いえ、壊れていないことが『おかしい』という意味ですか？」

私の頭の中には、自販機の前で紅茶を飲み干した光景が浮かんでいた。

自殺はしていないが、自殺未遂はすでに起こしている。

「おいおい。わたしが今言っているのは『彼女が持ち直した』という謎についてだ。過度のストレスを受けたにも関わらず、あそこで接客している。茶を汲んでいる。プログラム上ありえないんだよ。わたしの計算では、拾われてから半年で壊れているはずだった」

計算？

拾われマルチは矢橋班長から観察されていた……ということか？

「班長は、あのマルチの状態を知っていて、いつ自殺するか待っていたんですか？」

「まあね。どういう自殺方法を取るか興味があったんだ。それによって、今後の研究が進むから」

非情に思えた。しかし、矢橋班長は言葉を続けた。

「長瀬君の考えていることは分かるよ。だけど、彼女を初期化して、何もかも忘れさせることが君にできるかい？ 最悪の出来事に遭遇

しただろう彼女が、ドジしながら研究所で働いている。ドジを理由に彼女を殺すなんてできないよ。それなら、自殺してもらった方が、彼女のためになる」

私がこの人のことが好きなのは、たぶんこの独善的な思いやりのせいだろう。

片思いの相手が私を覗き込んで言った。

「ここからは単刀直入に聞く。長瀬君。君は彼女に何をした？」

私は、紅茶を飲み干した彼女をラボに連れて行っただけ。

だが、その程度のことはとくに班長は調べているだろう。何をしたか自分でも分かっていない。そして、私は自分でも予想外のことを口にした。

「内緒です」

途端に矢橋班長は爆笑した。開発二課全体に響き渡る大爆笑だ。

「よし！ 君をパダワンに任命しよう。エラーチェックは即刻中止。三課から誰か引っ張るから今日中に引き継ぎをしなさい」

「は？」

爆笑を止めたと思ったらパダワンに任命された。パダワンって何だっけ？

よく分からないが、何かが進行し始めたことを、わたしは感じた。

s t e p 2 開発進行 (2) (前書き)

前回更新から、間が開いてしまいました。すみません。

step2 開発進行 (2)

矢橋班長は爆笑を止めると、私をパダワンに任命した。パダワンとはスターウォーズにおける『弟子』のことだろうか？ それとも、天才矢橋が言う独特な比喩的な発言だろうか？

意味が分からず、周囲を見回したら、二課の同僚達も変な顔をしていた。拾われマルチも私と矢橋班長の顔を比べ見ていた。

「長瀬君の専攻は空間認知だったね。一週間あげる。好きな研究をして、好きに結果を出しなさい。予算は五十万。手が足りなくなったら、四課からインタンしている学生をいくらでも使っている。分かっているだろうが、研究機は拾われマルチだ。おい、拾われ！ 来なさい！」

矢橋室長に呼ばれ、マルチは駆けてきた。

「長瀬研究員の被検体になれ。これは命令だ。それと現時点を持って設定の変更を命じる。復唱しろ」

「はい。マスター」

高位ユーザーの矢橋室長によって設定が変えられていく。

「管理法人の項目から、来栖川コーポレーションを削除」

「削除します」

「管理ユーザーから矢橋京の名前を削除」

「削除します」

「以上」

「以上します……あ、すみません、新しくユーザー登録をして下さい」

「自分でしなさい」

急にソワソワと落ち着きを無くしたマルチと、三課に内線を掛けて、私の代行者を呼び寄せる矢橋班長。私はあっけに取られたままだった。

エラーチェックを止めて、自分の研究をしる？　しかも予算付きで？　一体、何が起きたんだ？

動揺を隠せない私に、矢橋班長が言った。

「どうしたんだね？　長瀬君。すぐに三課から引き継ぎ要員が来る。準備なさい。引き継ぎを早く終えるほど、君の研究時間は伸びるんだぞ？」

「は、はい！」

ニヤリと笑っている『マスター』こと、矢橋班長。彼女は私にチャンスをくれたのだ。一週間だが、エラーチェックという下請けを抜けられる。そして、自分のやりたい研究ができる。この幸運を掴んで結果に結びつければ、新しい展望も見えるはずだ。

デスクに戻ろうと走りかけると白衣を引っ張られた。私の服を二本の腕が掴んでいる。

一人は矢橋班長。もう一人は……

「あの！」

拾われマルチだった。そう言えば、こいつを被検体にしていいとのことだった。

「どうした？　マルチ？」

私の問い掛けに、なぜか矢橋班長が再び爆笑した。

「長瀬君。わたしのパダワンともあろう男が『どうした？　マルチ？』はないだろう？　今から大切な儀式が始まるんだ。研究の時間を確保することは必要だが、同時に慌ててはいけない」

儀式？

儀式って何だ？　なぜかマルチが私を凝視していた。マルチが高解像モニターで私の何を見ているのか分からなかったが、矢橋班長のマルチへの命令で理解した。

「拾われマルチに最後の命令だ。今、この瞬間、自分の意思でユーザー登録をしろ」

「ユーザー登録します。長瀬祐一さまを新規ユーザーに決定します」
は？

ペコリと頭を下げるマルチ。そして、クククと含み笑いをする矢橋班長。

「おめでとう。長瀬君。本当に君は愉快な男だな。わたしが作ったプログラムには自己ユーザー登録なんて機能はないのだぞ？　いいか。これから毎日レポートを提出しなさい」

「レポートって、研究についてですか？」

「その拾われ……いや、君が所有することになったマルチとの関係についてだよ。面白おかしく書いて欲しい。二課全体で回し読みするから」

ワツと二課のフロアが盛り上がった。私の白衣の裾を掴んだまま赤くなっているマルチ。矢橋班長はユーザー登録とか言っているが、これは告白されたようなものじゃないのか？

ロボットに告白されても嬉しくない。断じて嬉しくない。だが、ここで動揺すれば同僚たちに冷やかされるネタを与えることになる。

「や、矢橋室長！　長瀬祐一三等研究員、一週間の期限付きで自己裁量による研究を開始します！」

「ああ。頑張りなさい。手伝わないが、期待はしている」

離し立てる同僚を無視して、私は引き継ぎの準備を始めた。

「あのマスター、わたしにも何か仕事を……」

「マスターとか言うな！」

涙目になるマルチ。その背後から怒声が飛んだ。

「パダワン！ 告白した勇者を泣かすな！！ ダークサイドに落ちるぞ！」

矢橋班長に叱られた。そう言えば、告白失敗して自殺未遂を繰り返したと言っていた。この手のことに敏感なのだろう。

「……マルチよ……マスター呼ばわりは性に合わない。名前で呼んでくれ」

しかし返事がない。

怪訝に思い、マルチの顔を見ると真っ赤で、半開きの口から名前を呼ばれた。

「ゆ、ゆ、祐一さん」

「長瀬と呼べ！！」

二課に再び爆笑が渦巻いた。

この拾われマルチといると調子が狂って仕方がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5685n/>

Dear Multi

2010年10月8日12時13分発行